随想

山と山の会話

相馬 守胤
そうま もりたね

湖底からナウマン象の化石が発掘されたとか、友人が湖畔にわずか百坪の別荘地を買った話を聞いたくらいで、野尻湖についてはこれまでまことに縁が薄かった。妙高、黒姫にも登ったことがない。

五月中旬のある日、A氏の提唱で、二十数人とともに初めて湖岸を一周した。高山の裾は霧に包まれ、風はなく、やや肌寒い天気だったが、変化に富む湖岸の美しさは、昔の「芙蓉湖」という呼び名がふさわしかった。

途中、バスが入れない道を歩いて、湖岸に出た。南西岸にあたるだろうか、外人別荘村はそこにあった。避暑シーズンでもないせいか、静まり返り、石積みの低い護岸に細波が音もなく寄せては返していた。

A氏の追憶では、当時この道は舗装されておらず、ベーカリー、八百屋、鍛冶屋まであったという。ときにはピアノの音も流れていたそうだ。その追憶のページは、さぞかし語らざるディテールに満ちていたに違いない。

ことはそれだけで、格別強く印象に残るものはなかった。

ところがそのあと、日を経るにつれて、なぜかあの、成金趣味の豪華な別荘も、整ったショッピング街もない、むしろ物寂しいあの一郭が妙にこころの片隅に残り、やがて次第に勝手な想念が拡がっていくのが、我ながら不思議だった。まさかこの一帯に、諸々の思いを残して世を去った亡者の怨霊がただよっているわけでもあるまい。初めて訪れた場所で、ノスタルジアのあるはずもない。では何だろう。滅びの美学？　それともエキゾチシズム？　もしかして例のデジャヴュー、既視感というやつか。これはいささか危ない。

この奇妙な印象を、絵描きならキャンバスに、写真家なら印画紙に表現できたかもしれない。そのいずれもよくしない自分が歯がゆい。

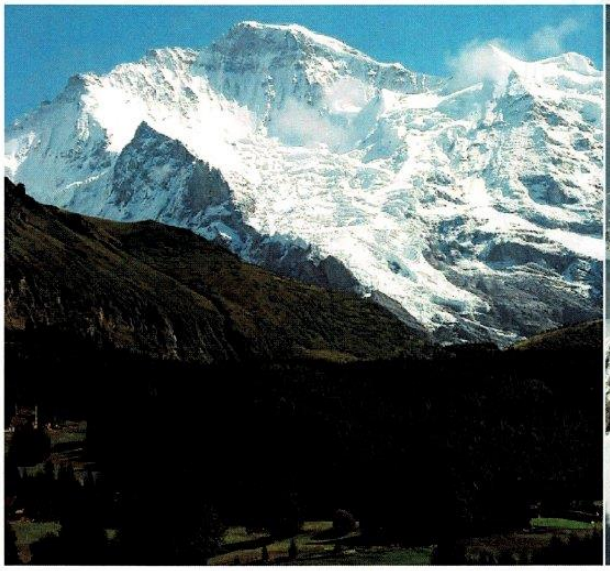
建物は取り壊され、空き地には蔦類が這ってのさばり、生垣の木はのび放題に荒れ果てて、ここにかつて生身の人間の喜びや悲しみ、ときには数奇な運命にもてあそばれた外国の人々の束の間の日々が繰り広げられていたであろう、その面影をわずかに今に伝えるこの一郭を表現するすべを知らない。

何もなかったかのように自然に返って、木々の梢をわたるそよ風のささやきと、岸辺を優しく洗う湖水の波音のほか、人声ひとつ聞こえない樹間にたたずんで、生まれては死に、死んでは生まれる人間の営みのはかなさを思ってみた。

日本に来るまえ、その人がしばしば避暑に訪れたスイスの湖。いや、それよりもっと原生の面影を濃く残したロシアやカレリア地方の、名も知らぬ小さな湖沼。鬱蒼たるタイガに囲まれ、道に迷った旅人や熊を追う猟師しか見たことのない、不気味なほど静まり返った湖。チェーホフの戯曲、イワン・ブーニンの短編、ソルジェニーツィンの珠玉のような小品などの舞台となる、北欧の湖・・・。野尻湖畔で夏を過ごすその人は、遠く離れた故国のどんな湖を思い浮かべていたことだろう。湖上にヨットを浮かべて遠望した妙高山は、スイス、クリミア、あるいはコーカサスのどんな山に似て見えただろうか。

第一次大戦、二次大戦、終戦、米軍の日本占領、そして神武景気、いざなぎ景気、とどまる所を知らぬかのような好況に浮かれた日本人たちのレジャーブームは、列島改造の掛け声に乗って、めぼしい景勝地の自然を「改造」しまくった。やがてバブル崩壊・・・。この半世紀、いや、日露戦争以来の一世紀に何を得て、何を失ったか。

ふと脳裏に浮かんだのは、ツルゲーネフの『散文詩』、ユングフラウ山とフィンスステラールホルン山の会話の一節だった。下界の景色が変わっていく姿を話し合うが、一言話すあいだに数千年が一瞬のように過ぎていく。やがて天道虫のように小さな人間たちも減り、雪と氷に下界は覆われる。やっと下界が静かになったようだ、さてここでもう一眠りしよう、と二つの山が眠りについたあとは、永遠に沈黙した大地の上空に、青い空が広がっているだけだった。

（注　この草稿は、私がいま住んでいる町で発行していた同好会誌『稜線』に、十年ほど前に寄稿するつもりで書いたものです。同人の妻にボツにされました。『水源地』にもボツにされる覚悟で提出します。なお、文中の「その人」とは、私の「勝手な想念」の産物です。著者、記）

「水源地」編集部より
このような素晴らしい文章をボツにするはずがありません。「水源地」はご投稿して頂いた文章には敬意を表し、全て掲載することを理念としております。